

ケーラー氏骨疾患ニ就テ

岡山縣病院「レントゲン」科

村 松 篤 治
笈 英 七 郎

ケーラー氏病ハ一九〇八年アルバン、ケーラー Alban Kohler 氏が「レントゲン」診断ノ結果初メテ小兒足骨舟狀骨ニ發見セル骨ノ變化ヲ特ニ命名セル疾患名ニシテ以來外國ノ文獻ニ於テハ報告セラレタルモノ多數アリト雖モ我國ニ於テハ今日迄報告セラレタル例ヲ知ラズ。

余等ハ「レントゲン」診断ノ結果偶然ニモ此ノ疾患ノ一例ニ遭遇セルヲ以テ茲ニ報告シ今日迄記載セラレタル種々ナル原因説ヲ附記セントス。

抑モケーラー氏病ハ小兒足骨舟狀骨ノ疾患ニシテ臨牀上ニ於テハ多クノ場合舟狀骨ニ相當セル部ニ腫脹ト輕度ナル壓痛アルノミニシテ患者ハ罹患セル側ノ足ヲ跛行ス。此ノ疾患ノ確實ナル診断ハ常ニ「レントゲン」撮影法ヲ待ツヲ要ス。而シテ此ノ「レントゲン」像ハ常ニ特有ニシテ舟狀骨發育ハ普通大ノ二分ノ一又ハ四分ノ一ノ大サヲ示シ其ノ構造不規則ナリ。即チアル部ハ狹小トナリアル部ハ鋸齒狀ヲナシ石灰含有量ハ普通ノソレニ比シニ倍乃至四倍ヲ有ス。

發見者ケーラー氏ガ一九〇八年初メテ實見セル三例ハ五歳ヨリ九歳迄ノ小兒ニシテ其ノ既往症ニ於テハ何レモ外傷ナカリシモ足背舟狀骨ニ相當セル部ニ疼痛アリテ跛行ス、外部所見ハ三例トモ健全ナリ然ルニ「レントゲン」検査結果何レモ舟狀骨ニ變化ヲ發見セリ殊ニ第三例ニ於テハソノ變化ヲ兩側ニ發見シ前述セル如クソノ「レントゲン」像ハ特有ナリキ、氏ハ此ノ變化ヲ骨發育異狀ナリト論ゼシガソノ發育障害ハ生後直ニ起リシモノニアラズシテ舟狀骨

化骨ハ一度ハ一定ノ大サニ達セルモ其ノ後ニ於テ萎縮ヲ來セルモノトナセリ然ルニ此ノ萎縮ヲ來セル原因タルヤ極メテ不明ニシテ、他ノ骨ニ變化ナキ點ヨリシテ「クレチニスムス」「モンゴリスムス」ニアラザル事ヲ斷定シ骨髓炎結核等ヲモ既往症竝ニ臨牀的所見ヨリシテ否定シ或ハ微毒性ノモノニアラザルカト稱セリ、然レ共其ノ詳細ナル検査成績ヲ記載セズ。

然ルニレツクリングハウゼン Recklinghausen ハ此ノ變化ヲ以テケーラー氏ノ初メテ發見シタル疾患トナサズソノ當時迄骨質軟化症トシテ取り扱ハレタルモノナリト論ジタリ。

アウグスト、ドービツシユ August Dobish ハケーラー氏ノ發見後間モナク此ノ疾患ヲ發見シケーラー氏病ナリト稱シ尙ホソノ原因モ微毒ニ起因スルモノナリトテケーラー氏說ニ贊セリ。

同シク一九〇八年ヘーミツシユ Haensch モ亦五歳ノ小兒ノ一例ニ於テケーラー氏病ヲ發見シ外傷ヲ元トセル發育異狀ニヨル變化ナリト斷定セリ、シエーフエル Schäfer モ同年五歳ノ小兒ノ右側足背腫脹疼痛アル患者ニ於テ「レントゲン」検査ノ結果舟狀骨ニ變化アルヲ發見シケーラー氏病ナリトナセリ而シテ此ノ患者ニ於テハ同足背ニ煉瓦ヲ落セル事アリシト雖モ第一回検査後治療スル事一年尙ホソノ後一年ヲ經過シ「レントゲン」撮影ヲナシタルニ舟狀骨ハ通常ノ形型ヲ取レリト云フ、只此ノ時腓腸筋ニ萎縮ヲ發見セルノミニシテ氏ハヘーミツシユノ外傷說ヲ否定シカ、ル變化ヲ來ス原因ヲ定ムルニハ多數ノ研究ト實驗トヲ待ツ可キモノナリト稱セリ。

然ルニ一九一二年シユルツエ Schulze ハ實驗セル二例ノケーラー氏病ニ於テソノ二例ハ既往ニ外傷ヲ受ケタル事アルニヨリ又ソノ「レントゲン」像ノ所見上壓迫骨折ノ狀ヲ呈シ尙ホ塊狀ノ化骨形成ヲ呈セル等ノ事實ヨリ舟狀骨ノ變化ヲ外傷ニ原因スルモノトナセリ。

其ノ他ライヘル Reyher (一九一二年) ハ此ノ疾患ヲ兩側ニ有スル一例ヲ報告シウレデー (Uredee) Wrede モ足蹠軟部損傷ニテ治療ヲ乞ヒ來レル五歳ノ小兒ニ此ノケーラー氏病ヲ發見シブレス Bis (一九一二年) モ亦五歳ノ小兒ニ於

テ左側舟狀骨ニ同様ノ變化ヲ實驗シソノ原因トシテ結核微毒ヲ否定シ發育障害ノ結果ナリト稱セシガソノ發育障害ノ原因ニツキテハ明記スル所ナシ。其他三、四ノ報告例アレ共之ヲ省畧ス。

以上ノ如クケーラー氏病ノ原因ニツキテハ各人ソノ意見ヲ異ニシ或ハ微毒性變化ナリト稱シ或ハ外傷ニヨリテ起レル變化ナリト稱スレ共結核骨髓炎等ニアラザル事ハ一般ノ人ノ認ムル所ナリ。

次ニ余等ガ遭遇セル一例ハ七歳ノ女子ニシテ特記ス可キ遺傳的疾患(結核、微毒等)ナシ患者ハ第二女ニシテ姉ハ健全ナリ。患者ハ七箇月早産ニシテ母乳ニヨリ保育セラレタル共體格小ニシテ生後一箇月頃全身腫脹發赤セル事アリシモ間モナク治シ以來健全ニ成長セリ。二年六箇月頃ヨリ歩行ヲ初メ左足ニ於テハ異狀ナカリシガ右足ハ何等原因ナク尖足ノ狀ヲ呈シタリ、ソノ後同部ノ按摩ニヨリ輕快セシガ成長スルト同時ニ漸次歩行困難トナリシ爲メ依テ本院ニ來リ當科ノ検査ヲ受ケタル次第ナリ(大正七年三月六日)當時患者ノ體格營養ハ共ニ不良ニシテ頸部淋巴腺ハ小指頭大ニ腫脹セルモノヲ觸ル、右足ハ尖足ノ狀態ニシテ歩行障害アレ共足關節ノ他動的運動ハ尋常ナリ。ソレヨリ前方ノ關節運動ハ他動的ニモ多少障害セラレタル如シ。

「レントゲン」撮影ハ内側ヨリ外側ニ向ヒテ行ヒタルニ、次圖ニ示ス如ク兩側共ニ著明ナル變化ヲ發見スルヲ得タリ。之ヲ見ルニ右足舟狀骨ハ極メテ小ナルニツノ化骨核ノ如キ狀態ニアリソノ一ツハ米粒大他ハ點狀ヲナス、石灰含有量ハ多量ナルガ如クソノ陰影濃厚ナリ。(第一圖)

左足ニ於テハ舟狀骨葡萄種大ニシテ陰影ノ濃厚ナル事右足ノソレノ如シ。其他ノ骨ニ於テハ「レントゲン」像ノ所見上變化ヲ認メズ、余等ハ茲ニ於テ「レントゲン」像ノ所見ニヨリケーラー氏病ナル事ヲ確定セリ。

以來特別ナル治療法ヲ施サズシテ一年半ヲ經過シタル後「レントゲン」検査ヲナシタルニ以前極メテ小ナリシ舟狀骨ハソノ大サニ於テハ稍普通大トナリシガ跟骨面ニ於テハ構造不規則ニシテ殊ニ右足ニ於テ著明ナリキ。尙ホ石灰含有量ハ他ノ諸骨ニ比シテ多量ナル事著明ナリ(第二圖)。尙ホ外見上ニ於テハ兩足トモ尖足ノ狀ヲ呈セリ。

以上諸報告竝ニ余等ノ實驗例ヲ綜合參照スルニツノ年齡ニ於テハ五歳ヨリ九歳ノ者ニ多キ疾患ナリトス。余等ノ例ニ於テハケーラー氏ノ一例ウレデー(?)氏ノ一例ノ如ク兩足ニ變化ヲ發見セリ。又余等ノ例ニ於テハ外傷ノ既往症ナキ點ヨリツノ原因ヲシユルツエ其他二、三人ノ稱スルガ如キ外傷ニアリト云フ能ハズ尙ホケーラー氏ガ一九一三年調査セル發見以來ノ二十六例ニ於テツノ三分ノ二ハ外傷ヲ缺ケリト記載ヲ見テ余等ハ益々外傷說ニ反對スルモノナリ。又余等ハビルケー、フツセルマン氏反應ヲ行ハザリシモ既往症竝ニ「レントゲン」像ヨリシテケーラー、アウグスト、ドービツシユ氏等ガ主張セル微毒說ヲ否定スルニ各ナラザルナリ。尙ホ且之等疾患ハ甚ダ多キニモ拘ラズケーラー氏病ガ少ナキ點ヨリ見テモ明ナラン。

余等ハ又ケーラー氏ガ云フガ如キノ發育障害ノ生後一定ノ期日ヲ過ギテ起リシトノ說ヲ信ズル事ヲ得ザレ共兎ニ角舟狀骨ノ單獨ナル發育遲延又ハ一時的發育障害ナル事ハ賛スル者ナリ。然レ共ツノ發育障害ノ原因竝ニ何故舟狀骨ニノミ起ルカトノ疑問ニ對シテハ應答スルノ信ナキナリ。只舟狀骨ノ化骨核形成ガ他ノ諸骨ニ比シ尋常ナル場合遲キハ多少意義アルモノナランカ、尙ホ此ノ疾患ハ足部「レントゲン」診斷ニ際シ常ニ注意ヲ要ス可キモノナリト信ズ。

- 1) Alban Koehler: Münch. Med. Wochenschr, 1908, No. 37.
- 2) Alban Koehler: Archiv für Klinische Chirurgie, 1913, Hef. 23.
- 3) August Dolbisch: Münch. Med. Wochenschr, 1908, No. 44.
- 4) C. H. Bies: Münch. Med. Wochenschr, 1913, No. 35.
- 5) Ernst, O. P. Schütze: Archiv für Klinische Chirurgie, 1912, Hef. 2.
- 6) G. Feder Haemisch: Münch. Med. Wochenschr, 1908, No. 46.
- 7) Kay Schoeffer: Münch. Med. Wochenschr, 1910, No. 29.
- 8) Reyher: Ref. Münch. Med. Wochenschr 1912, No. 18.
- 9) Wrede: Ref. Münch. Med. Wochenschr, 1912, Hef. 12.
- 10) Wohlaer: Ref. Münch. Med. Wochenschr, 1912, No. 17.
- 11) W. R. Heyel: Ref. American Journal Med. Association, 1917, No. 13.

(左) 圖 二 第



(右) 圖 一 第



圖 三 第

